

ガラテヤ人への手紙 6:7-10

7. 思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、刈り取りもすることになります。
8. 自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊に蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。
9. 失望せずに善を行いましょう。あきらめずに続ければ、時が来て刈り取ることになります。
10. ですから、私たちは機会があるうちに、すべての人に、特に信仰の家族に善を行いましょう。

おはようございます。今日は、ガラテヤ人への手紙の最後の章、6 章を、皆さんとご一緒に見ていきたいと思います。

＊導入＊

ガラテヤ人への手紙は、使徒パウロが、ガラテヤ地方のいくつかの教会に宛てて書いた手紙です。教会に集う人たちのほとんどは、もともとユダヤ人ではなく、異邦人でした。彼らは福音を聞いて、本当に喜んでそれを受け入れたのです。

ところが、しばらくすると、あるユダヤ人の教師たちがやって来ます。そして、こう教え始めました。「イエスを信じるだけでは、十分ではない。割礼を受けて、律法も守らなければならないのだ。」つまり、信仰による救いに、人間の行いと功績を付け加えなければならない、という教えが入り込んできたのです。

では、なぜ人々はそれを受け入れてしまったのでしょうか。おそらく、その方がもっともらしく聞こえたからかもしれません。信仰だけで救われる、という事実を、人はなかなか受け入れられないものです。「自分も何かしなければいけないのではないか」「自分の努力も必要なのではないか」——そんな思いが、自然に湧いてくるのです。「救い」に自分の功績を少しでも加えたいと願うこと、それが、私たち人間の罪深さなのかもしれません。神様の御業を認めることよりも、自分の力を注ぎ込むことに、私たちはかえって安心と納得を覚える存在なのかもしれないのです。

けれども、福音というのは不思議なもので、人間の功績を加えた瞬間、もう福音ではなくなってしまう。中国に「蛇足」という言葉がありますね。人々が地面に蛇の絵を早く描く競争をしていました。一人の男が一番早く描き終えましたが、余裕を見せようとして蛇に足を描き加えてしまいました。最終的に、「蛇には本来足がないのに、描いたのは蛇ではない」と言われ、その男は最初に絵をかき終わったにも関わらず、勝利を取り消されてしまいました。福音も同じです。神様がなさった働き、それに人間の功績を少しでも加えると、より完全な福音になるのではなく、全く別のものになってしまうのです。

そこでパウロは、この手紙全体を通して、信仰のみによって義とされるという福音を、力強く弁護していきます。同時に、もう一つのことも警告しています。律法から自由を得たか

らといって、その自由を放縱に変えてしまうことです。ガラテヤ人への手紙は、律法主義も退けますし、放縱主義も退けます。ただ、聖霊の中で生きる歩みだけを、語っているのです。

そうすると、一つの疑問が浮かんでくるのではないのでしょうか。行いによってではなく、信仰によって救われるのなら、その後どう生きるかは、もう関係ないのでしょうか。パウロの答えは、はっきりと「いいえ」です。救いは行いによるものではありません。けれども、救われた者がどこに向かって生きているかには、確かな結果が伴うのです。今日一緒に見ていく本文は、まさにこの問いに答える、結論の部分だと思います。

### \* 侮られない神様 \*

パウロは、5章16節から25節にかけて、肉と御霊を、互いに戦う二つの勢力として描いてきました。「肉が望むことは御霊に逆らい、御霊が望むことは肉に逆らいます」(5:17)とある通りです。クリスチャンの人生は、まるで戦場のようです。

ところが、6章になると、たとえが変わります。戦場だったものが、今度は畑に例えられるのです。肉と御霊は、私たちが種を蒔く、二つの畑になります。

私たちが何を刈り取ることになるか。それは、今、どこに種を蒔いているかに、かかっているのです。

しかし、このたとえに入る前に、パウロは、7節でとても厳粛にこう語ります。  
「**思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、刈り取りもすることになります。**」

ここで、少し立ち止まって考えてみたいのですが——順序に注目してほしいのです。パウロは、いきなり「蒔いたとおりに刈り取る」とは言いませんでした。まず「思い違いをしてはいけない」。それから「神は侮られるような方ではない」。そう言うってから、初めて「人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになる」と語るのです。

なぜでしょうか。おそらく、私たち人間が、まさにこの一点において、いちばん簡単に自分自身を欺いてしまうかもしれません。例えば、「これくらいなら大丈夫だろう」「あとで悔い改めればいい」「少しくらい世的に生きても構わないだろう」「神様も分かってくさるだろう」——と、私たちは、いくらでも自分を正当化することができてしまうのです。人は、他人を欺くこともできますし、自分自身さえも、欺くことができるのです。けれども、神様を欺くことだけは、決してできません。神様は、私たちの言動よりも、私たちの心の思いを見ておられるからです。何を言葉を発したかよりも、こころの本当の思いはどこにあるのかを、見ておられるのです。

だからこそパウロは、「神様は侮られるような方ではない」と言うのです。この「侮る」ということば、もとのギリシャ語では「鼻を高く上げて、あざ笑う」という意味があります。でも、神様をあざ笑うというのは、口先で神様をばかにすることだけではないと思います。

それは、神様が立てられた秩序(神様が天地創造の際に定めたルール)を、軽く見るこ

となのです。神様が定められた霊的な原理を知っていながら、「自分には当てはまらない」と考えてしまうこと——それが、神様を侮ることなのです。

例えば、私たちは、「蒔いたとおりに刈り取る」という原理そのものは、疑いません。自然の秩序としては、あまりにも当然のこととして、受け入れているのです。大麦を地に蒔いて、いちごを刈り取ると願う人はいないでしょう。豆の種を蒔いて、さつま芋の収穫を期待する人はいないでしょう。これを疑う人は、誰もいないでしょう。蒔いたとおりに刈り取るというのは、神が自然の中に据えられた、創造の秩序だからです。

ところが、この同じ原理が、霊的な領域に当てはめられるとなると、私たちは、少し話が違ってきてしまいます。自然界では当然のこととして受け入れていたことを、霊的な領域では、なんとかして例外を見つけようとしてしまうのです。

肉に蒔き続けながら、御霊の実を期待することはできません。世を愛しつつけながら、神様により近づくことを願うこともできません。みことばよりも自分の欲望に従って生きながら、聖い人生を期待することは、できないのではないのでしょうか。

それでも私たちは、しばしば、そのように生きてしまいます。肉に蒔き続けながら、霊的な収穫を期待してしまうのです。祈らずに、信仰が育つことを願います。みことばに親しまずに、神様をもっと知ることを願います。隣人を赦さずに、愛の実が結ばれることを願うのです。しかし神は、こう語られます。「人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。」私たちは、自分自身を欺くことはできても、神を欺くことは、できないのです。

ですから、このみことばは、まず他人に適応するより、まず、私たち一人ひとりが、自分自身を振り返るための言葉として、受け取りたいと思います。今、私はどこに種を蒔いているのでしょうか。

#### \*肉に蒔く\*

パウロは、続けて 8 節でこう言います。

「**自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊に蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。**」

まず、「肉」とは何か、はっきりさせておきましょう。ガラテヤ人への手紙が語る「肉」というのは、単に私たちの体のことではありません。いくつかの罪深い行為だけを、指しているのでもありません。神様なしに生きようとする、人間の存在そのものを指すことばなのです。ですから、肉は、二つの、まるで違う姿で現れることがあります。一つは律法主義、もう一つは放縦主義です。

表面だけ見れば、この二つは正反対です。律法主義者は、規則を徹底的に守ろうとします。放縦主義者は、規則そのものを無視します。けれどもパウロは、この手紙全体を通して、この二つを、両方とも「肉」と呼んでいるのです。なぜでしょうか。

どちらも、中心に自分自身があるからです。律法主義は、「自分はどれだけ立派に行ったか」「自分はこれらの規定を守ることができた」ということにしがみつきます。放縦主義は、「キリストを信じて自由になったのだから、自分のしたいように生きる」ということにしがみつきます。方向は違っても、王座に座っているのは、どちらも自分自身なのです。

そこでパウロは、ガラテヤ人への手紙 5:19-21a  
「肉のわざは明らかです。すなわち、淫らな行い、汚れ、好色、  
偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、  
ねたみ、泥酔、遊興、そういった類のものです」

そして、はっきりとこう言うのです。「以前にも言ったように、今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。このようなことをしている者たちは神の国を相続できません。」(ガラテヤ人への手紙 5:21b)。

そして 24 節では、こう宣言します。「キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、情欲や欲望とともに十字架につけたのです。」

「肉に蒔く」というのは、この「肉」を十字架につけるのではなく、むしろ肉に餌を与え続け、育て続けることだと言えるでしょう。

例えば、心の中に憎しみを抱き続けようとする。絶対許せないと決心すること。貪欲を育ち続けようとする。みことばよりも、世の声にもっと重みを置き選びつつけること。そのたびに私たちは、肉に種を蒔き続けているのです。最初は、小さな種のように見えるかもしれませんが、けれども、種は必ず育ちます。必ず実を結びます。だからこそパウロは、「肉から滅びを刈り取る」と言うのではないのでしょうか。

#### \*御霊に蒔く\*

では反対に、御霊に蒔くというのは、どういうことでしょうか。

ここでパウロは、興味深い表現を使っています。5 章では、「御霊によって歩みなさい」(5:16)と言いました。けれどもここでは、「御霊に蒔く」と言うのです。つまり、人生の方向が、どこを向いているか、そのことを問うているのではないのでしょうか。

御霊に蒔くというのは、私たちの人生の方向を、神様に向けることです。ここで、一つ忘れないでいたいことがあります。私たちは、御霊に蒔くことによって、神の子どもになるわけではありません。すでにキリストにあって、新しい創造とされ、子供となっているからこそ、神様に向きを変えることができ、御霊に蒔く自由と力が与えられているのです。

ですから、御霊に蒔く人生は、決して抽象的なものではなく、とても具体的な形で現れます。倒れた兄弟を、柔和な心で立て直すこと(6:1)。互いの重荷を、負い合うこと(6:2)。よいものを分かち合うこと(6:6)。そして、機会あるごとに、すべての人に善を行うこと(6:10)。御霊は、いつも、人を自分自身から、神様と隣人へと向けさせてくださいます。そして、この実が、私たちの内に、また私たちを通して現れるまでには、時間が必要なのです。

#### \*あきらめずに\*

パウロは、続けて 9 節で、こう勧めます。

「9. 失望せずに善を行いましょう。あきらめずに続ければ、時が来て刈り取ることにあります。」

なぜパウロは、種まきの話のすぐあとに「失望せず」と語ったのでしょうか。農夫のことを思い浮かべてみてください。種を蒔いたからといって、翌日に収穫する農夫はいません。種を蒔き、待ち、雨に打たれ、強い日差しに耐えながら、長い時間を過ごします。(秋には、めぐみ教会で焼き芋がありますね。毎年とても楽しみにしていますが、その芋も収穫に至るまで、多くの方々が手間をかけて育ててくださっています。)今はまだ目には見えなくても、やがて収穫が得られることを確信しているからです。このような自然の秩序において、私たちは収穫を信じて種を蒔き続けます。

このような自然の秩序を、私たちは神様が定められたものとして、ごく当たり前のことのように受け入れています。そして、この秩序は霊的な世界においても、まったく同じように働くのです。

御霊に蒔く人生も同じです。祈ったからといって、一晩で人が変わるわけではありません。みことばを読んだからといって、すぐに人格が変わるわけでもありません。善を行ったからといって、すぐに報われるわけでもないのです。むしろ、肉に従って生きるほうが、はるかに簡単で、すぐに満足を得られることが多いものです。だからこそ、人は簡単に失望してしまいます。「祈っても変わらない」「みことばを読んでも何も変わらない」「善を行っても、誰も認めてくれない」と。

けれどもパウロは、こう言うのです。「失望せずにいれば、時期が来て、刈り取ることになります。」ここで言う「時期」とは、ただ時間が流れるという意味ではありません。神様が定められた時のことです。私たちは、結果が見えるから待つのではなく、神様の約束を信じるから、待つのです。神様ご自身が、蒔いたとおりに刈り取らせてくださると、約束してくださったのですから。ですから、御霊に蒔く人は、決して無駄に蒔いているわけではありません。

＊機会あるうちに＊

最後にパウロは、10 節でこう結論づけます。

「ですから、私たちは機会があるうちに、すべての人に、特に信仰の家族に善を行いましょ  
う」

まず「すべての人に」とありますね。国籍も、年齢も、性別も、社会的な立場も——私たちが善を行うべき理由を、制限することはできません。

そして、パウロは「特に信仰の家族に」とも語ります。私たちは時に、クリスチャンが、同じクリスチャンに対して、かえって厳しく接してしまうことがありますね。「クリスチャンなのに、どうしてあんなことをするのか」「あの人は律法主義的だ」「あの人は聖書をよく分かっていない」。そうやって互いを裁き合うのではなく、むしろ信仰の家族にこそ、特に善を行いなさい、とパウロは勧めているのです。

御霊に蒔く人生は、決して抽象的な人生ではありません。目の前にいる兄弟を愛し、重荷を共に負い、善を行う人生として、現れてくるのです。

それでは、この「善を行う」ということは、具体的に何を意味するのでしょうか。もう気づいた方も、いらっしゃるかもしれません。結局のところ、これは「愛しなさい」ということばと、変わらないのです。力を尽くして、愛しなさい、ということです。

また完璧に愛して初めて認められる、という意味ではないのです。私たちは、肉の弱さのために、いくらでも間違った所に種を蒔いてしまうことがあります。愛そうとして始めても、途中で疲れてしまい、形だけが残ることもあるでしょう。けれども、そのたびに失望するのではなく、もう一度、祈りながら心を整えて、御霊に蒔くことを求めればいいのです。愛し続けることを選べばよいのです。完璧だからではありません。つまりくたびに、また蒔き直すこと。そのたびに自分自身を神様と、隣人への向けること、まさにそのために、私たちは召されたのではないのでしょうか。

#### \*適用\*

今日の本文を通して、パウロは私たち一人ひとりに、一つの問いを投げかけています。「あなたは今、どこに種を蒔いていますか。」

この問いは、私たちを責めるための問いではありません。神の前で、静かに、自分自身を吟味するための問いです。

私たちは毎日、何かに時間を使い、何かを求め、何かを愛しながら生きています。そして、その一つ一つが、私たちも気づかないうちに、種を蒔いていることになるのです。ですから、種を蒔くというのは、何か特別な出来事だけを指すではありません。毎日の、小さな選択の積み重ねなのです。

でも、パウロが語る「種を蒔く」ということは、単に行動を積み重ねることだけではないように、私は思います。その行動が、どこから生まれているのか。その人の心の中心が、どこにあるのか。そこまで含んでいるのです。ガラテヤ人への手紙の最後で、パウロは、割礼を勧める人々について、こう語ります。「彼らはあなたがたの肉について誇りたいためです」(6:13)。問題は、割礼という行動そのものではありませんでした。その行動の中心にあったものが、神様ではなく、自分自身だったということなのです。

私たちも、同じではないのでしょうか。もっと信仰が成長したい。もっと神に近づきたい。もっと愛せるようになりたい。そう願います。けれども、そのための種を、実際に蒔いているでしょうか。そして、その歩みは、本当に神様へと向かっているのでしょうか。

信仰の家族を、愛そうとしているのでしょうか。愛することが難しい、あの人のためにも、祈っているのでしょうか。それとも、「あの人にも問題があるんだから」「今は仕方がない」と、自分の心をそのままにして、そこで終わらせてしまっていないのでしょうか。聖書が勧める愛は、相手によって変わるものではありません。私たちが神に心を向けるとき、御霊が、私たちを、隣人を愛する歩みへと導いてくださるのです。

ですから今日、私たちは、自分自身に問いかけたいと思います。「私は今、どこに種を蒔いているだろうか。」そしてもう一つ。「私の心は、本当に神様へと向いているだろうか。」神様は、私たちの行いだけでなく、その心の中心を、ご覧になっておられるからです。

#### \*結論\*

パウロは、こう語りました。「善を行うのに飽いてはいけません。失望せずにいれば、時期

が来て、刈り取ることになります。」

収穫は、私たちが思う時にではなく、神様が定められた時に、与えられます。けれども、その時が遅く感じられたとしても、神様の約束が変わることはありません。神様は、侮られるような方ではなく、ご自分が定められた秩序にも、約束にも、いつも真実なお方だからです。

ですから私たちは、神の約束を信じながら、その秩序を恐れつつ、今日も、御霊に蒔き続けたいと思います。

神様に心に向け、その恵みに生かされながら、一步、また一步、御霊に導かれて、歩いていくことなのです。

「あなたは今、どこに種を蒔いていますか。」

主のこの問いを、心に刻みながら。失望することなく、御霊に種を蒔き続ける私たちでありますように祈ります。